「わが懐かしき歌」補遺 21　　2018/12/30（日）・

『ローレライ（Loreley）』は、フリードリヒ・ジルヒャー（Friedrich Silcher による 1838 年作曲のドイツ歌曲。歌詞は、ハインリッヒ・ハイネ Heinrich Heine の詩が用いられました。日本では、1909 年(明治 42 年)の『女声唱歌』に掲載された近藤朔風氏による訳詞が広く知られています。
ライン川のローレライの岩山のあたりは流れが急で、昔から遭難する船が多かったため、魅惑の美声で人々を惑わす妖精ローレライの伝説が生まれました。

『ローレライ　Die Lorelei』
作曲:　フリードリヒ・ジルヒャー
作詞:　ハインリヒ・ハイネ
訳詞:　近藤　朔風

1.
なじかは知らねど心わびて
昔のつたえはそぞろ身にしむ
さびしく暮れゆくラインのながれ
いりひに山々あかくはゆる

2.
うるわしおとめのいわおに立ちて
こがねの櫛とり髪のみだれを
梳きつつくちずさぶ歌の声の
くすしき魔力（ちから）に魂（たま）もまよう

3.
こぎゆく舟びと歌に憧れ
岩根もみやらず仰げばやがて
浪間に沈むるひとも舟も
くすしき魔歌（まがうた）うたうローレライ

(原詞)
1. Ich weiß nicht, was soll es bedeuten,
Daß ich so traurig bin,
Ein Märchen aus uralten Zeiten,

Das kommt mir nicht aus dem Sinn.
Die Luft ist kühl und es dunkelt,
Und ruhig fließt der Rhein;
Der Gipfel des Berges funkelt,
Im Abendsonnenschein.

2. Die schönste Jungfrau sitzet
Dort oben wunderbar,
Ihr gold'nes Geschmeide blitzet,
Sie kämmt ihr goldenes Haar,
Sie kämmt es mit goldenem Kamme,
Und singt ein Lied dabei;
Das hat eine wundersame,
Gewalt'ge Melodei.

3. Den Schiffer im kleinen Schiffe,
Ergreift es mit wildem Weh;
Er schaut nicht die Felsenriffe,
Er schaut nur hinauf in die Höh'.
Ich glaube, die Wellen verschlingen
Am Ende Schiffer und Kahn,
Und das hat mit ihrem Singen,
Die Loreley getan.

.

「わが懐かしき歌」補遺 20　　2018/12/14（金）

1939 年(昭和 14 年)に、古関吉雄は、「追憶」と題して、「星影やさしく　またたくみ空」で歌い出す歌詞を発表し、以降、学校教科書などで取り上げられるようになりました。戦後、1947 年(昭和 22 年)には中等音楽（三）に掲載されました。今朝はなぜかこの歌、特に、「はうらのそよぎは。。。」と転調するところが、書いている今も耳についてはなれません。

『追憶』
作詞：古関吉雄 (訳詞) 作曲：スペイン民謡

星影やさしく またたくみ空
仰ぎてさまよい 木陰を行けば
葉うらのそよぎは 思い出さそいて
澄みゆく心に しのばるる昔
ああ なつかしその日

さざ波かそけく ささやく岸辺
すず風うれしく さまよい行けば
砕くる月影 思い出さそいて
澄みゆく心に しのばるる昔
ああ なつかしその日

<参考> 世界の童謡・民謡 worldfolksong.com より:

「追憶」（ついおく）は、アメリカ合衆国で賛美歌、聖歌として歌われていた「フリー・アズ・ア・バード (Flee as a bird)」ないし「フリー・アズ・ア・バード・トゥ・ユア・マウンテン (Flee as a bird to your mountain)」に、古関吉雄が日本語詞をつけたものである。

「フリー・アズ・ア・バード」は、アメリカ合衆国の詩人で、賛美歌の作詞作曲もしたメアリ・S・B・シンドラー（英語版）（旧姓：ダナ (Dana)）が、スペインの旋律をもとに、旧約聖書の詩篇（第 11 篇）に基づいて作詞した賛美歌とされる。ただし、原曲となった具体的な楽曲は特定されていない。曲名は「鳥のように、（向こうの山に）飛んでゆけ」を意味する冒頭の 1 行から取られている。

Flee as a bird

Flee as a bird to yon mountain,
Thou who art weary of sin;
Go to the clear flowing fountain,
Where you may wash and be clean.
Fly for th' avenger is near thee,
Call, and the Saviour will hear thee,
He on His bosom will bear thee;

Oh, thou who art weary of sin.
Oh, thou who art weary of sin.

He will protect thee forever,
Wipe every falling tear;
He will forsake thee, Oh, never,
Sheltered so tenderly there!
Haste then, the hours are flying,
Spend not the moments in sighing,
Cease from your sorrow and crying,
The Saviour will wipe ev'ry tear,
The Saviour will wipe ev'ry tear.

この曲は、セカンド・ラインとして知られるニューオーリンズにおける黒人の葬送の際によく演奏される楽曲でもあり、それを再現したジャズ・ミュージシャンによる演奏でもしばしば取り上げられた。

日本語での歌唱　編集

「フリー・アズ・ア・バード」をもとに日本語詞をつける取り組みの最初は、1890 年に『明治唱歌　第五集』に収録される形で発表された、大和田建樹による「月みれば」であった。

「月みれば」

霞にしづめる　月影見れば
浮世を離れて　心は空に
海原しづかに　波もなき夜を
松原ねむりて　月もなき夜半を
　あゝめでゝや　空に

布ひく雲間に　かかれる見れば
この世のにごりも　忘れて空に
萩ちる野末に　鹿のなく夜を
花咲く芦辺に　雁の来る夜半を
　あゝめでゝや　空に

1919 年には、ユニテリアンのサークルであった「惟一倶楽部」名義の日本語詞による「故小妹」（こしょうまい）が発表され、後には喜波貞子や藤山一郎によって録音も行われた。

「故小妹」

更けゆく鐘の音　思いうつせみの
果なき面影　結びもあえず

忽（たちま）ち夢さめて　とめし我が手に残しし
ゆかりの色濃き　若紫の
ああ　ゆかりの小袖

思い出づれば　十年（ととせ）の昔
はるけき旅路に　我等残しし
幼き姉妹（はらから）の　夢の面影なれや
更けゆく鐘の音　昔を語る
ああ　ゆかりの小袖

「我が懐かしき歌」補遺 19　　2018/12/11（火）・

「故郷を離るる歌」は 1913 年(大正 2 年)7 月に『新作唱歌　第五集』に発表されました。「小鮒釣りし」と同じ語句の出てくる高野辰之の広く親しまれている「故郷(ふるさと)」は翌年 1914 年(大正 3 年)に発表されています。ドイツ語の原詞と較べてみますと、原詞は恋人を愛する詞ですが、訳詞の方は故郷を愛す歌になっています。これはひょっとして「唱歌」を意識してのことでしょうか？

『故郷を離るる歌』
吉丸一昌　作詞　ドイツ民謡

一
園の小百合　なでしこ　垣根の千草
今日は汝(なれ)を眺むる　最終(おわり)の日なり
おもえば涙　膝を浸す　さらば故郷
さらば故郷　さらば故郷　故郷さらば

二
土筆摘みし　岡辺よ　社の森よ
小鮒釣りし　小川よ　柳の土手よ
別るる我を哀れと見よ　さらば故郷
さらば故郷　さらば故郷　故郷さらば

三
ここに立ちてさらばと別れを告げん
山の影の故郷　静かに眠れ
夕日は落ちて黄昏たり　さらば故郷
さらば故郷　さらば故郷　故郷さらば

『Der letzte Abend 』
1.
Wenn ich an den letzten Abend gedenk,
Als ich Abschied von dir nahm !
（repeat)

Ach, der Mond, der schien so hell,
Ich mußt scheiden von dir,
Doch mein Herz bleibt stets bei dir,

[Chor]
Nun ade, ade, ade, nun ade, ade, ade,
Feinsliebchen lebe wohl !

2.
Meine Mutter hat gesagt,
Ich sollt 'ne Reiche nehm'n,
Die da hat viel Silber und Gold.

Doch viel lieber will ich mich
In die Armut begeb'n,
Als dich, mein Schatz, verlassen.

(Chor)

3.
Großer Reichtum bringt uns keine Ehr,
Große Armut keine Schand.

Ei, so wollt ich, daß ich
Tausend Taler reicher wär
Und hätt' dich an meiner Hand.

(Chor)

4.
Ich gedenke noch einmal reich zu werd'n,
Aber nicht an Geld und Gut.

Wollte Gott mir nur schenken
Das ewige Leb'n,
Ei, so bin ich reich genug.

(Chor)

5.
Das ewige Leb'n, viel Glück und Seg'n
Wünsch ich dir viel tausendmal !

Und du bist mein Schatz
Und du bleibst mein Schatz,
Bis in das kühle Grab.

(Chor)

.

「我が懐かしき歌」補遺 18　　2018/12/1（土）

五木の子守唄は、熊本県球磨郡五木村に伝わる子守唄で、現在では熊本県を代表する民謡としても知られています。この歌が日本を代表する子守唄になる前に、この歌は 1930 年に、田辺隆太郎（人吉市の小学校教師）によってはじめて発見されて、採譜、編集されたといわれています。しかし、この歌は当時すでに五木村では歌われなくなっており、どのようにして発見されたかは謎とされています。ザ・ピーナッツがこの歌を歌っていて、1970 年に発表され、ザ・ピーナッツのレコード「お国自慢だ!ピーナッツ」に収録されているようです。美空ひばり、テレサ・テンも歌っていたということです。(参考・Wikipedia)

『五木の子守歌』
　熊本県民謡

おどま盆ぎり盆ぎり
盆から先きゃおらんと
盆が早よ来るりゃ　早よもどる

おどま勧進勧進
あん人たちゃよか衆
よか衆ゃよか帯　よか着物

おどんがうっ死んだちゅうて
誰が泣いてくりょか
うらの松山　蝉が鳴く

おどんがうっ死んだら
道端ちゃいけろ
通る人ごち　花あぎゅう

花は何んの花
つんつん椿
水は天から　もらい水

正調・五木の子守唄

おどまいやいや
泣く子の守りにゃ
泣くといわれて憎まれる
泣くといわれて憎まれる

ねんねした子の
かわいさむぞさ
起きて泣く子の面憎さ
起きて泣く子の面憎さ

ねんねいっぺんゆうて
眠らぬ奴は
頭たたいて尻ねずむ
頭たたいて尻ねずむ

おどんがお父つぁんな
あん山ゃおらす
おらすともえば行こごたる

おらすともえば行こごたる

■代表的な子守唄の歌詞の意味■

おどま盆ぎり盆ぎり　盆から先きゃおらんと　盆が早よくりゃ早よもどる

（子守奉公も盆で年季が明け　恋しい父母がいる古里に帰れる日が待ち遠しい。）

おどんが打っ死(ち)んだちゅうて　だいが泣いてくりゅうか　うらの松山蝉が鳴く

（遠く離れた所に子守奉公にきて私が死んでも だれも悲しまないただ蝉が鳴くだけでさびしい。）

おどんが打っ死(ち)んだら　往還(みち) ばちゃ埋(い)けろ
通るひと毎(ご)ち　花あぐる

（私が死んでも墓参りなどしてくれないだろう　それならば人通りがある道端に埋葬してもらったほうが誰かが花でもあげてもらえるだろ。）

花はなんの花　ツンツン椿　水は天からもらい水

（あげてもらう花は何でもいいが　道端にたくさんある椿でよい水がなくても雨が降ってくるから。）

おどんがお父っつあんは　あん山(やみゃ)おらす　おらすともえば
いこごたる

（私の父は遠くに見えるあの山で仕事をしているだろう又あの山の裾に古里があり早く帰りたい気持ちが増々大きくなる。）

おどまいやいや　泣く子の守にゃ　泣くと言われて憎まれる

（子守にとっては泣きやまぬ子はどうしようもなく どんなにあやしても泣きやまない子守の仕方が悪いと叱られる。）

ねんねした子の　可愛さむぞさ　おきて泣く子のつらにくさ

（子守背中ですぐ寝る子は　子守にとって楽であるが　いつまでも泣いて寝ない子は普段は可愛いけれど憎らしい。）

歌詞の意味: https://www.vill.itsuki.lg.jp/komo…/komoriuta_kashi_imi.html

「我が懐かしき歌」補遺 17　2018/11/24(土)

「ひばり」は 1911 年(明治 44 年)に発表された文部省唱歌です。作詞の乙骨三郎は第一高等学校時代にピアノ、オルガンに親しんだということで、東京帝国大学文科大学哲学科卒、東京音楽学校教授や國學院大學講師として西洋音楽の普及・教育に努めました。また『日の丸の旗』『浦島太郎』『池の鯉』などの唱歌の作詞者としても知られています。なお、乙骨家は多くの学者を輩出している家系(＊文末参照)で、父の乙骨太郎乙は旧幕臣、英文学者で沼津兵学校教授でした。

『ひばり』
乙骨三郎作詞、作曲者不詳
1.
ぴいぴいぴいと　さえずるひばり
さえずりながら　どこまであがる
高い　高い　雲の上か
声は聞こえて　見えないひばり
2.
ぴいぴいぴいと　さえずるひばり
さえずりやんで　どこらへおちた
青い　青い　麦の中か
姿かくれて　見えないひばり
＊)以下、Wikipedia によれば、乙骨三郎の弟に英文学者の乙骨五郎がいる。また祖父は儒学者の乙骨耐軒。また母つきは杉田玄白の曾孫に当たる。詩人・翻訳家の上田敏は従兄弟（上田の父・綱二は耐軒の次男）。なお、沼津兵学校は明治元年(1868 年)、徳川家によって創立され、教授陣に錚々たる幕臣を擁したが、明治になって次々と明治新政府に引き抜かれ、明治 5 年(1872 年)には東京に移転されて事実上消滅した。初代校長は西周。西は 1862 年(文久 2 年）に幕命で津田真道・榎本武揚らとともにオランダに留学し、法学・カント哲学・経済学・国際法などを学んだ。慶応元年(1865 年）に帰国した後、徳川慶喜の側近として活動したが、王政復古を経た慶応 4 年（1868 年）、徳川家によって開設された沼津兵学校初代校長に就任した。明治 3 年（1870 年）には乞われて明治政府に出仕、以後兵部省・文部省・宮内省などの官僚を歴任し、軍政の整備とその精神の確立に努めた。明治 6 年（1873 年）には森有礼・福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・西村茂樹・津田真道らと共に明六社を結成し、翌年から機関紙『明六雑誌』を発行。啓蒙家として、西洋哲学の翻訳・紹介等、哲学の基礎を築くことに尽力した。

「我が懐かしき歌」補遺 16

1912 年（明治 45）、『尋常小学唱歌　第三学年用』に発表されたもの。今朝通勤時に空を見上げると、雁(?)が群れをなして飛んで行きました。シャッターチャンスを逃して少し小さくなってしまいましたが。頭に浮かんで来たのは「雁が渡る」

『雁がわたる』
文部省唱歌

一、
　雁がわたる、
　鳴いてわたる。
　　鳴くはなげきか喜びか。
　　月のさやかな秋の夜に、
　　棹になり、かぎになり、
　わたる雁、おもしろや。
二、
　雁がおりる、
　連れておりる。
　　連れは親子か友だちか。
　　霜の眞白な秋の田に、
　　睦つましく連れだちて
　おりる雁、おもしろや。

.

「我が懐かしき歌」補遺 15　2018/9/7（金）

『おおひばり』
訳詩: 高野 辰之 作曲: F. メンデルスゾーン

おお　ひばり　　高くまた
軽く（かろく）なにをか　うたう
天のめぐみ　地のさかえ
そをたたえて　うたう
そをことほぎ　うたう

ドイツ語原詩

Wie lieblicher Klang,
O Lerche, dein Sang!
Er hebt sich, er schwingt sich in Wonne!
Du nimmst mich von hier,
Ich singe mit dir,
Wir steigen durch Wolken zur Sonne,

直訳

何と愛らしい響きか
おお、ひばり、お前の歌は！
彼は自分自身で飛翔し、至福の中に舞い上がる！
お前は地上から私を運び去り
私はお前と歌う
我々は雲の切れ間から太陽に登る

(川島靖之氏(リーデルクランツ OB 会)による)

.

「我が懐かしき歌」補遺 14　　2018/8/21（火）

　映画「生きる」のなかである日、胃ガンで余命いくばくもないことを知らされた市役所の市民課長が、絶望と孤独の中で生きる意味を考えた末、自分が完成させた公園のブランコに乗って幸せそうに歌った「ゴンドラの唄」。

『ゴンドラの唄』
作詞: 吉井勇　作曲: 中山晋平

いのち短し　恋せよ少女（おとめ）
朱（あか）き唇　褪（あ）せぬ間に
熱き血潮の　冷えぬ間に
明日の月日は　ないものを

いのち短し　恋せよ少女
いざ手をとりて　彼（か）の舟に
いざ燃ゆる頬を　君が頬に
ここには誰れも　来ぬものを

いのち短し　恋せよ少女
波に漂（ただよ）う　舟の様（よ）に
君が柔手（やわて）を　我が肩に
ここには人目も　無いものを

いのち短し　恋せよ少女
黒髪の色　褪せぬ間に
心のほのお　消えぬ間に
今日はふたたび　来ぬものを

.

「我が懐かしき歌」補遺 13　　2018/8/12（日）

「白い色は恋人の色」は、ザ・フォーク・クルセダーズのメンバーだった北山修と加藤和彦が作詞・作曲を手がけた曲で、1969 年にリリースされました。アメリカ人女性デュオのベッツィ&クリスが放ったヒット・シングルで、翌年に渡ってヒットしました。

『白い色は恋人の色』
作詞: 北山修　作曲: 加藤和彦

花びらの白い色は恋人の色
なつかしい白百合は恋人の色
ふるさとのあの人の
あの人の足もとに咲く白百合の
花びらの白い色は恋人の色

青空のすんだ色は初恋の色
どこまでも美しい初恋の色
ふるさとのあの人と
あの人と肩並べ見たあの時の
青空の澄んだ色は初恋の色

夕やけの赤い色は想い出の色
涙でゆれていた想い出の色
ふるさとのあの人の
あの人のうるんでいた瞳にうつる
夕やけの赤い色は想い出の色
想い出の色　想い出の色